

Title	創出される表象空間：遍路道再生運動の事例から
Sub Title	Created space for representation : the case of pilgrims' footpaths renewal movement
Author	浅川, 泰宏(Asakawa, Yasuhiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.35- 64
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, the author discusses "Pilgrims' Footpaths Renewal Movement (PFRM)" that has become popular in modern Shikoku Henro pilgrimage. The purpose of this paper is as follows: 1) to add an observation on a challenge of reorganization of modern sacred space by focusing on pilgrims' ways. 2) to suggest emphasis on local communities in arguing cases of folk religion and tourism. PFRM is a phenomenon named by the author to indicate "a series of trials to rediscover and restore pilgrims' footpaths and pilgrimage-related cultures, to share them as assets by four prefectures in Shikoku and to appeal them to both inside and outside of Shikoku." The movement originates in an idea to reconsider that pilgrims' footpaths are the historical heritage with one-thousand-year-tradition and folkways such as Settai, provision of food or other necessities to pilgrims, are inherent culture. It also aims to appeal the importance of "Path of prayers," deconstruct them cleverly and make use of them as resources of tourism and local communities making. The author takes up a project that started in 2000 by the then prefectural governor of Tokushima, explains its overview and analyzes it from viewpoints of folk religion, tourism and local communities. The author then examines significance of PFRM, reorganization of sacred space and expected behavior and attitude of local people in each of the above three contexts.
Notes	特集文化人類学の現代的課題II 第1部 空間の表象 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0038">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0038</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

## 創出される表象空間

—— 遍路道再生運動の事例から ——

— 浅 川 泰 宏\* —

### Created Space for Representation: The Case of Pilgrims' Footpaths Renewal Movement

*Yasuhiro Asakawa*

In this paper, the author discusses “Pilgrims’ Footpaths Renewal Movement (PFRM)” that has become popular in modern Shikoku *Henro* pilgrimage. The purpose of this paper is as follows: 1) to add an observation on a challenge of reorganization of modern sacred space by focusing on pilgrims’ ways. 2) to suggest emphasis on local communities in arguing cases of folk religion and tourism.

PFRM is a phenomenon named by the author to indicate “a series of trials to rediscover and restore pilgrims’ footpaths and pilgrimage-related cultures, to share them as assets by four prefectures in Shikoku and to appeal them to both inside and outside of Shikoku.” The movement originates in an idea to reconsider that pilgrims’ footpaths are the historical heritage with one-thousand-year-tradition and folkways such as *Settai*, provision of food or other necessities to pilgrims, are inherent culture. It also aims to appeal the importance of “Path of prayers,” deconstruct them cleverly and make use of them as resources of tourism and local communities making.

The author takes up a project that started in 2000 by the then prefectural governor of Tokushima, explains its overview

---

\* 明治大学兼任講師

and analyzes it from viewpoints of folk religion, tourism and local communities. The author then examines significance of PFRM, reorganization of sacred space and expected behavior and attitude of local people in each of the above three contexts.

**Key words:** sacred space, pilgrimage, tourism, folk religion, local community

本稿は、1. 聖なる空間の現代的変容という課題に対して、「道」という観点からの考察を付与すること、2. 宗教民俗とツーリズムの複合現象において表出する「地域」という問題への着眼を提起すること、の2点を目的に、現代の四国遍路で顕著に見られる「遍路道再生運動」を考察するものである。

## 1. 聖なる空間の現代的変容をめぐって

### (1) 聖なる空間をめぐる諸研究——宗教地理学と「空間論的転回」

近年、宗教研究と空間論の接合、すなわち「聖なる空間」をめぐる議論が活発である。空間を研究する代表的学問である地理学には、宗教と空間の関連性に着目する宗教地理学 (geography of religion) という領域がある。その成立自体は新しいものではないが、1990年頃より、これまでの研究蓄積を見直し、その動向を再整理する試みが、松井圭介や小田匡保らによってなされている。

松井は、欧米の研究動向を踏まえながら宗教地理学の領域と位置づけを示した。また日本の宗教地理研究が、1) 風土・自然環境と宗教、2) 都市・村落景観と宗教、3) 巡礼、4) 宗教の分布・伝播と空間構造の4つの中心テーマを有していたと指摘し、それぞれの動向と課題を示した [松井 2003: 1-37]。

小田は、1945年から1996年までの人文地理学の文献目録から、400件近い宗教地理学の文献を抽出し、時代ごとの文献数や研究テーマを整理

した。宗教地理学の文献数は年々増加しており、主な研究テーマには①宗教都市・宗教集落、②巡礼・参詣、③墓制、④宗教分布・信仰圏、⑤村落の宗教組織、⑥絵図、⑦山岳聖域があるという [小田 2002]。

また歴史地理学会でも、2003年と2004年の共同課題を「宗教文化の歴史地理学」に設定し、シンポジウム等を行うなど [小田 2005 他]、聖なる空間への地理学的関心は高まっている。

こうした動向は、文化的営みとしての「宗教」が、社会的構築物としての「空間」を創出するということへの改めての着目といえよう。空間を社会的に生産され消費されるものと捉え直した「空間論的転回 (spatial turn)」の議論 [LEFEBVRE 1974 (2000), SOJA 1989 (2003), HARVEY 1989 (2005) など] や、文化や民俗を操作し、利用することが可能なものとする文化人類学における「流用」「客体化」の議論 [太田 1998]、民俗学における資源化の議論 [岩本編 2007] などとつながる視点である。

このとき、聖なる空間もまた「生きられる空間」となり、人々の営みによって重層化し、変容するフローな概念となる。鈴木正崇は、このような観点から空間を人々の暮らしの経験や記憶の累積するものと理解し、祭祀を通して表象されるコスモロジーを動態的に読み解くという考察を行った [鈴木 2004]。

## (2) 巡礼の空間論的再考——地理学、社会学、宗教学の視点から

これら聖なる空間をめぐる研究動向のなかで、重要な研究対象としてしばしば共通して取り上げられるのが巡礼 (pilgrimage) である。

巡礼を空間論的に問い直す視点を持った地理学の研究としては、1980年代から90年代にかけて行われた田中智彦の一連の仕事がある。田中は、巡礼者によって実際に踏み固められた実践的な空間としての巡礼路を重視し、巡礼者の記録や足跡からこれを「復元」という作業を、西国巡礼などを事例に行った [田中 2004]。

また 1990 年代から 2000 年代にかけて、「道空間 (road space)」という概念を通して巡礼空間の社会学的な問い直しを行っているのが、長田攻一、坂田正顕らの早稲田大学道空間研究所である。坂田によれば、道空間とはまず、様々な形態を持つ道—すなわち線的空間特性を持つ移動空間—を包括する上位概念である。そして〈内部機能〉として、タルコット・パーソンズの AGIL 図式に準えられるエネルギー処理機能 (Adaptation)、移動機能 (Goal attainment)、コミュニケーション機能 (Integration)、象徴的意味生成機能 (Latency & Tension management) をもつ多元的・重層的空間と説明される。さらに現代四国遍路の場合、巡礼空間（遍路空間）は〈遍路道〉〈札所〉〈休息所〉という 3 つの下位空間から構成され、それぞれ G と I, L, A の機能が第一次的に配分されるとするモデルが提示されている [坂田 2003]。

一方、宗教学の立場から、巡礼世界を理解する上でのランドスケープの重要性を指摘するのがイアン・リーダーである。彼は四国遍路を対象とした近著において、次のような学問的系譜から、巡礼のランドスケープへの注目を促す。まずリーダーが取り上げるのが、サイモン・コールマン & ジョン・エルスナーの議論である。彼らはヴィクター・ターナー以降の人類学的巡礼研究が巡礼行為のみに注目し、聖地を「空虚な空間 (empty space)」と見なしてきたと批判し、物理的な設置物や建築物の重要性を指摘した [COLEMAN and ELSNER 1995]。リーダーはコールマンとエルスナーの巡礼空間への着目を評価しながらも、それが物理的次元に留まっているという限界を指摘する。その上で、ランドスケープが持つ物語性の重要性を指摘したナンシー・フレイのサンティアゴ巡礼についての著作 [FREY 1998] に着目する。それを踏まえて到達したのが、“moving visual texts” と表現される物質的側面と感覚的側面を併せ持ち、常に人々によって加筆・修正される巡礼のランドスケープである [READER 2005]。

この巡礼のランドスケープには地形、建築物、仏像、道標、奉納物の他、伝説や物語、歴史、記憶、感情などの「情報」、そして人々までが含まれる。リーダーの言う巡礼のランドスケープは、感覚的な“emotional landscape”に力点が置かれており、それを経験する主体によって構築＝再構築される「読み書き可能な環境」のことを指すと筆者は理解している。すなわち彼は、ランドスケープという視点から、巡礼世界を認識の構築物として捉えようと試みているのである。

### (3) 巡礼とツーリズム——宗教とツーリズムの観点からの聖なる空間

巡礼とは聖なるものが顕現する特別な場——すなわち聖地——への旅である。したがってそれは日常と非日常を往復する時間＝空間構造を持つ。ツーリズムもまた、同様の構造を持つことを指摘したのがネルソン・グレイバーンである。彼はエドモンド・リーチの儀礼プロセスのモデルを用い、聖なる (sacred) 次元を観光 (tourism) に、俗なる (profane) 次元を労働 (work) に読み替えることで、それを端的に示した [GRABURN 1989: 25]。

こうした巡礼とツーリズムの親和性や現代社会における融合状況への着目を柱のひとつとして、山中弘ら宗教研究者を中心に「宗教とツーリズム」という新しい研究分野の開拓が行われており、筆者も昨年よりこれに参加している<sup>1</sup>。

宗教とツーリズムという観点から、聖なる空間の創出や変容を考える

<sup>1</sup> 山中らと筆者は、2006年9月の日本宗教学会第65回学術大会（於東北大学）では「宗教とツーリズム—聖なるものの「現在」をめぐる—」と題したパネル発表を、2007年6月の「宗教と社会」学会第15回学術大会（駒澤大学）では「ツーリズム・聖地・巡礼」と題したテーマセッションを行った。本稿は後者における口頭発表を元に行っている。また前者については、これを発展させた拙稿 [浅川 2008] が刊行予定である。なお、これらの共同発表を元に、山中弘を代表とする「宗教とツーリズム」プロジェクトが、「宗教と社会」学会において2007年6月に発足し、活動している。

時、想起されやすいのは、ありふれた場が、ある出来事を契機として、特別視され、物語が付与され、「聖地化」されるという筋書きであろう。いわば「聖地生成論」というべき議論であり、宗教社会学が得意としてきた宗教教団の発生・展開論とも重なるものである。

典型例として思い浮かぶのは、近現代のマリア出現の聖地 [関 1993] であろう。特にフランスのルルド (Lourdes) における公式巡礼団 (pèlerinage officiel) や巡礼支援組織「オスピタリテ (Hospitalité)」の成立史を丹念に描き出した寺戸淳子の研究 [寺戸 2006]、マルタのギルゲンティ (Girgenti) で体験者ジュザ・ミフスッドがその語りを洗練させ、自ら創設した信者組織に共有されていくプロセスを分析した藤原久仁子の研究 [藤原 2004] は、こうした聖地生成論の労作と言えよう。

また現在進行中の事例として興味深いのが、2007 年 1 月に世界遺産の暫定リスト入りが決まった長崎の教会群である [松井 2006, 2007, 木村 2006, 山中 2006]。忘れられていた「歴史」や「記憶」、「伝統」がツーリズムの文脈から掘り起こされ、それらがあたかも現代に脈々と続いていたものであるかのようなみずみずしい聖地として提示され、世界遺産というグローバルな「観光ブランド」へと高められつつあるというプロセスは、再構成された聖地のサクセス・ストーリーの趣がある。

聖地は巡礼の空間構造の中心である。だが現代においては、遍路道や熊野古道、サンティアゴ・デ・コンポステーラの「カミーノ (Camino)」のように巡礼路が重視される例も少なくない。そこでは空間の聖性がどのように意味づけられ、読み替えられているのであろうか。

上述の研究動向と問題意識を踏まえながら、本稿では一例として、四国遍路の「遍路道再生運動」を分析する。遍路道再生運動の出発点は、四国八十八ヵ所の巡礼路である遍路道を 1000 年の伝統を持つ歴史遺産として、またそれに付随する接待などの習俗を固有の文化として捉え直すこと

にある。そして、宗教的な「祈りの道」としての遍路道の重みをアピールしつつ、巧みにそれを脱構築し、ツーリズムや地域づくりの資源として再活用する方向性を持つ。

山中弘は、宗教とツーリズムという研究テーマの切り口として、(A) 行政、観光産業、地域住民などの聖地を変革させる外側からの力、(B) 巡礼・観光の直接的な体験者・当事者の内なる意識という2つの着眼点を示した〔山中 2007〕。(A) の視点からは、「世俗的セクター」が聖地を商品化し、観光資源として積極的に利用するという事例が、長崎や江ノ島から報告されている〔松井 2007, 森 2007〕。

遍路道再生運動もこれに類するものといえる。だが興味深いことに、実際のみちづくりの場面においては、ツーリズムよりもむしろ「地域」「地域づくり」という文脈が前面に出る傾向がある<sup>2</sup>。そこでは、観光客のニーズにいかに応えるかという受動的なホストとしての姿勢ではなく、むしろ「自分たちがどのようなものであるのか」を、外からやってくる人々にプレゼンテーションし、同時に彼ら自身においても確認するという積極性が見られるのである。

その意味で、宗教とツーリズムの接合という研究領域における本稿の位置づけは、上記 (A) に対して、宗教、ツーリズム、そして地域という少なくとも3つの領域の関係性の力学を、具体例から読み解くという知見を追加することにある。

## 2. 遍路道再生運動とその社会的背景——平成遍路ブームと架橋時代

2000年頃より四国遍路で注目されるようになったのが、「遍路道再生運

<sup>2</sup> 「地域」が差すものを詳細に議論することは簡単ではない。昨今の文化人類学や民俗学における地域性に関する議論を承知しながらも、ひとまずここでは、事例として取り上げる「いやしのみち」が、行政単位としての市町村を基盤とするという事情から、それを第一義とする。



動」“Pilgrim's Footpaths Renewal Movement (PFRM) と総称すべき試みである。「遍路道再生運動」は筆者の仮説的造語であるが、「四国遍路の巡礼路である『遍路道』や、それに関連する諸々の『遍路文化』を再発見・再生し、四国四県の共有財産として位置づけ、内外に発信していこうという方向性を持った試みを広く総称するもの」と理解されたい<sup>3</sup>。

四国遍路では平成期に、徒歩巡礼すなわち「歩き遍路」が復活し、社会現象として定着した。この「平成遍路ブーム」において興味深いのは、弘法大師ゆかりの場であり、巡礼者の祈りの場である聖地＝札所寺院よりも、それらを繋ぐ移動空間である巡礼路＝遍路道が、時に札所以上に深い巡礼体験を与える場として理解され、重視されることである。

遍路道再生運動は、巡礼者側からの遍路道重視の声に対する地元からのリアクションである。特に 2000 年前後のものについては、次の 3 つの社会的潮流があったことが指摘できる。

- ①NHK『四国八十八ヵ所』によって加速した平成遍路ブーム
- ②明石海峡大橋と X ハイウェイの開通という四国の交通体系の劇変
- ③ミレニアムや 21 世紀という時代の節目の意識がもたらした未来的  
ヴィジョン

歩き遍路の復活を中核とする平成遍路ブームは、1990 年代頃から確認できる。しかし、これを社会現象として定着させたのが 1998 年から 2000

---

<sup>3</sup> 遍路道再生運動で行われる様々な活動には、四国遍路以外の対象へと広がりを持つものも含まれる。だが、中核に位置づけられるのは遍路道であり、また全体を統括するキーコンセプトについても「接待」に代表される四国遍路に関連する文化・民俗から引用されるなど、その関連性が極めて濃厚であることから、巡礼研究の立場から、これらを「遍路道再生運動」と総称することは、許容される範囲であると思われる。

表 1 主な「遍路道再生運動」

	名 称	提唱者・代表者	発足・活動開始年
1	へんろみち保存協力会	宮崎建樹氏 (寝具商・徒歩巡礼実践者)	1988 年頃
2	世界遺産運動 (※4 へ展開)	小山田憲正氏 (56 番仙遊寺住職)	1998 年 1 月 24 日
3	世界遺産登録運動	四国四県・経済同友会	1999 年
4	四国いやしのみちづくり事業	圓藤寿穂氏 (徳島県知事)	2000 年 1 月 12 日
5	『四国へんろ道文化』世界遺産化の会	小山田憲正氏 (56 番仙遊寺住職)	2000 年 9 月 23 日
6	新四国の道	国土交通省四国地方整備局	2000 年 10 月 23 日
7	四国八十八ヵ所へんろ小屋プロジェクト	歌一洋氏 (建築家・近畿大学教授)	2001 年
8	遍路道清掃活動	新開善二氏 (地域ボランティア活動)	2004 年
9	世界遺産登録運動	財団法人とくしま地域政策研究所/徳島ユネスコ協会	2005 年

※正式名称が不明あるいは現時点で存在しないものについては、筆者が仮称をつけ、斜字体で示した。

年にかけて放送された NHK の『四国八十八ヵ所』である。単発の特別番組ではなく、四国遍路の情報が 2 年間にわたって毎週繰り返し放送されたことの意味はやはり大きい。放送が開始された 1998 年 4 月 5 日は四国遍路の歴史において特筆すべき日と言えよう。

同時にこの日は四国の地域史にとっても、歴史的な一日であった。明石海峡大橋の開通である。本州四国連絡橋は 3 ルートあるが、明石海峡大橋の開通は、神戸・大阪という大都市と四国を直結した点が特筆される。翌年には愛媛と広島を結ぶしまなみ海道が開通したことで 3 つの連絡橋

が完成し、1980年代から運用されている瀬戸大橋と合わせて、四国は本格的な架橋時代に入った。さらに『四国八十八ヵ所』の放送が終了する直前の2000年3月11日には、四国四県の県庁所在地を高速道路で直結する「Xハイウェイ」が完成する。これら歴史的プロジェクトの完成によって、四国の交通体系は革命的に刷新された。関西・中国地方から四国への、あるいは四国島内の所要時間は劇的に短縮され、四国への観光がブームになった。四国遍路においても、高速道路網のメリットをフル活用した日帰り巡礼ツアーが登場するなど、活況を呈した。

すなわち遍路道再生運動は、遍路ブームと架橋ブームという四国に向けられた聖俗の複眼的まなざしを背景として産み出されたものなのである。当時、四国に向けられた関心を一過性のものに終わらせてはならないという危機意識や、「島国」であり「後進」地域であった四国の積年の思いが結実したインフラの果実を手に入れた次に、いったい何をなすうのかという問いかけが行政や経済・観光業界においてなされていた。これらが「新世紀」「ミレニアム」という歴史的な節目において成立した100年、1000年単位の長期的パースペクティブによる未来像の模索と結びつくなかで、同時期に注目され、知名度が高まっていた「遍路道」が取り上げられたことは、自然なこととも言えよう<sup>4</sup>。

遍路道再生運動は、重点をおく活動分野によっておおむね三分される。

(1) 物理的な「道」の保全・整備を重視するもの、(2) 抽象的な「文化」の見直し・発信を重視するもの、(3) 学術的な研究・教育を主眼とするものである。(1)(2)をまとめたのが表1である<sup>5</sup>。多様なエージェント群がさまざまな運動を提唱、実践していることが理解できよう。本稿では物理的

<sup>4</sup> 加えて、Xハイウェイが官公庁や大企業の支所・支社が多い香川県高松市に集約していた既存の鉄道網や道路網の構造を認識論的に解体し、四県を対等に結びつけたのと同様に、遍路道も四国を周遊し、一体化させるトポロジーを有していたことも関係したと思われる。

な空間の再構成を伴う (1) の中から、「四国いやしのみちづくり」事業に注目したい。

### 3. 徳島県「四国いやしのみちづくり事業」——歩く道から表象の道へ

#### (1) 理念と概要

「四国いやしのみちづくり」事業（以下、「いやしのみち」と略記）は、2000年1月に当時の徳島県知事・<sup>えんどうとしお</sup>圓藤寿穂氏（在職：1993年10月－2002年3月）が、徳島県の21世紀記念事業の一つとして提唱した遊歩道整備事業<sup>6</sup>である。

圓藤元知事は、県の広報誌『OUR 徳島』2000年1月号において、20世紀をF1に、21世紀をソーラーカーに例え、アクセル全開の経済成長の世紀から、適切なスピードで走る調和と環境の世紀へというヴィジョンを示し、経済的豊かさへの偏重から、文化的・生活的な豊かさへの転向を、「すばらしいふるさと」を築くための政策の方向性として述べている。いやしのみち構想が発表されたのは、その冒頭においてである。

ここではいやしのみちは、行政と住民との「協働」、「調和」、「環境」等、21世紀に向けてのキーワードの元で、遍路道を「1200年の歴史」に基づく歴史文化遺産と捉え、これを保存・復元・活用すると同時に、周辺

<sup>5</sup> (3) については、愛媛県生涯学習センターが2000年から3カ年計画で実施した、「遍路文化の学術整理」や、今治明德短期大学が2001年より実施している歩き遍路の体験学習などが挙げられる。また(2)については世界遺産への登録を目指す方向へと展開することが多い。2007年現在、(A) 56番仙遊寺住職の小山田憲正氏を中心とする「『四国へんろ道文化』世界遺産化の会」、(B) 四国四県の経済同友会、(C) 財団法人とくしま地域政策研究所/徳島ユネスコ協会、と少なくとも3つのグループがある。

<sup>6</sup> 同様の試みとして、国道交通省四国地方整備局が同年に発表したのが「新四国の道」である。「いやしのみち」とはある程度の連携が図られており、例えば、鴨島町、神山町のルートは「新四国のみち」と「いやしのみち」の二重指定区間になっている。

の歴史文化資源をつなぎあわせることで、「固有の歴史や文化に触れ、四季折々の自然を楽しみながら、優しさや、美しさを肌で感じ、心を豊かにする」「徳島の21世紀への宝づくり」と説明されている。遍路道の整備を中核とすることや、基本的にアスファルト舗装をしないことなど、いくつかの具体的なポイントもあるが、それ自体、新世紀における県政のヴィジョンと重ねられるような、全体として理念的で抽象的な「みち」である。

この提言を受けて、徳島県は2000年6月30日に第1回「四国いやしのみちづくり検討会議」を徳島市で開催した。そこでは学識経験者（田中智彦ら）や巡礼実践者（へんろみち保存協力会の宮崎建樹氏）らによるパネルディスカッションに加え、一般の参加者にも大判のポストイットが配布され、意見の提出が求められた。同会議は7月28日（第2回）と9月8日（第3回）と継続して行われ、その検討内容は『四国いやしのみちづくり指針・提言集』〔徳島県編2001〕としてまとめられた。

指針・提言集はいやしのみちの目的を、「へんろみちや四国のみち<sup>7</sup>を基本とし、周辺の歴史文化資源をつないだ歩く道づくりを県民と行政が協同で行うことにより、地域の歴史・文化、自然等の再確認をしていただくとともに、県外の人々に情報発信することにより、交流促進及び地域の活性化を促進する」ことにあると説明する。また、いやしのみちの条件として挙げられているのが、以下の5つである。

- ①県民と行政が協同で進めるみちづくりであること
- ②訪れる人と地域住民が相互に価値を持つみちであること
- ③持続性のあるみちであること
- ④各ブロック（区間）に「テーマ」や「もてなし」を持つこと。

<sup>7</sup> 遍路道をモデルに1980年代に建設省や環境庁が整備した遊歩道。建設省ルートは、三全総に基づく長距離自然歩道計画の一部をなす。

## ⑤連続性があり、四国全体への発展性を持つこと

そして具体的な事業の方向性は、遍路道等からメインルートを選定し、これに「自然、景観、歴史文化資源、お接待など」の「いやしスポット」を含んだ周遊性のあるテーマルートを「サブルート」として接続させることが記されている〔徳島県編 2001: 2〕。

これらをまとめると、いやしのみちは、(1) 1980年代に建設省や環境庁が整備した「四国のみち」や、徳島県教育委員会が1998年より進めてきた「徳島県歴史の道」の調査報告など、過去の行政事業による蓄積を踏まえ、(2) 住民参加型で進められる新しい形の歩道整備事業であり、(3) 接待等の文化から導かれた「もてなし」という心的テーマや、(4) 四国遍路の「伝統」や周回的構造に繋がる「四国」を全体的・永続的に捉える超空間的・超時間的視点が埋め込まれている、といった特徴を持つと言えよう。さらに事業の中核に四国遍路を設置しながらも、「いやしスポット」や「サブルート」という仕掛けによって、(5) その周辺空間をも取り込む、広範な発展性を確保したものにもなっている。

つまり、いやしのみちは単なる巡礼路の整備事業ではない。「昔ながらのへんろみちなどを基本ルートとし、新たな寄り道スポットをプラスした」ものであり、「徳島の魅力をもう一度見つめ直し、歴史文化資源などに光を当て交流も活発にして、地域を活性化しようとするもの」〔徳島県編 2004: 1〕なのである。

## (2) 事業の構造と登録地域

いやしのみちに関するエージェントを示すのが図1である。連携をとる四県の合同機関「いやしのくに四国交流推進協議会」は、Webサイト (<http://www.shikoku.gr.jp/iyashi/>) の運営等を通じて、対外的な情報発信を行う。事業主体である県は、全体的なマネジメントや事業計画の

## 創出される表象空間

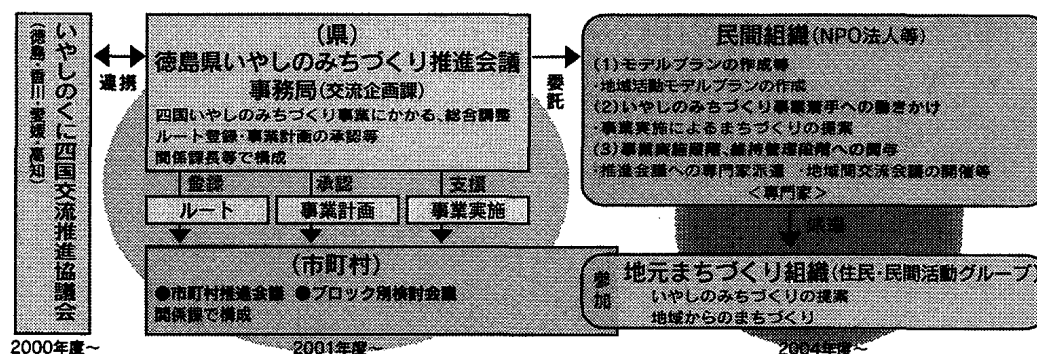


図1 「いやしのみち」事業の運営構造。〔徳島県編 2004〕より抜粋。

表2 徳島県内の「いやしのみち」登録地域（2003年度現在）

	市町村	登録年度	ルート名	周辺の札所
1	鴨島町	2001年6月	四国三郎をまたぐ最後まで残った空海の道	11番藤井寺
2	神山町	2001年12月	衛門三郎を偲ぶ、最後まで残った空海の道	12番焼山寺
3	上板町	2003年7月	かみいた路・道・未知・和（なごみ）ロード	6番安楽寺
4	勝浦町	2003年度	みかん・もてなし・ふれあいロード	20番鶴林寺

承認、予算の交付などの役割を担うが、実際にルートやテーマを策定し整備するのは各市町村である。道としての連続性や他県との連携を志向するとはいえ、県側はトップダウン型の計画を押しつけることはせず、市町村側からの自発的な登録希望によって事業が進められる。したがって、本事業は、早急な完成を目指すものではなく、「たとえ100年かかったとしても」少しずつ形になるような持続性をもった事業展開を目指すのだと、県担当者は強調する<sup>8</sup>。

現在、徳島県で事業に登録・参加している市町村は、麻植郡鴨島町（現・吉野川市）、名西郡神山町、板野郡上板町、勝浦郡勝浦町の4地域で

<sup>8</sup> 2005年2月に実施したインタビューによる。

ある（表2）。

各登録地域では、策定・承認されたルートをもとに、それぞれのテーマにそって、休憩所やトイレ、案内板などの設置といったハード的な整備や、ルートマップの作成、接待の実践などソフト的な活動を行っている。

### （3）鴨島町「四国三郎をまたぐ最後まで残った空海の道」の場合

登録地域では、どのような場所を「いやしスポット」とし、どのようなルートを「いやしのみち」として設定しているのであろうか。最初の登録地区である鴨島町の事例を見てみたい。

鴨島町は現在の吉野川市の中心地であり、11番藤井寺の所在地である。遍路道は町の西南側をかすめるように走っている。鴨島町ではこの遍路道をメインルートとし、やや東側に入った西麻植地区の江川湧水源を經由する道をサブルートとして組み込んだ。江川湧水源は、湧水の温度が夏は冷たくて冬は暖かいという水温異常現象で知られており、環境省選定の全国名水百選や県の天然記念物にも指定されている「鴨島町のシンボルの存在」である。



図2 江川湧水源。〔徳島県 2002〕より転載。



## 創出される表象空間

ルート名に「四国三郎をまたぐ」とあるように、このルートへは吉野川にかかる潜水橋であり、四国遍路のビューポイントである「川島橋」を渡って入る。ルートやテーマの設定、事業内容の具体的な行動計画は、「鴨島塾」と名づけられた住民・参加者会議で検討された。川遊びや、江

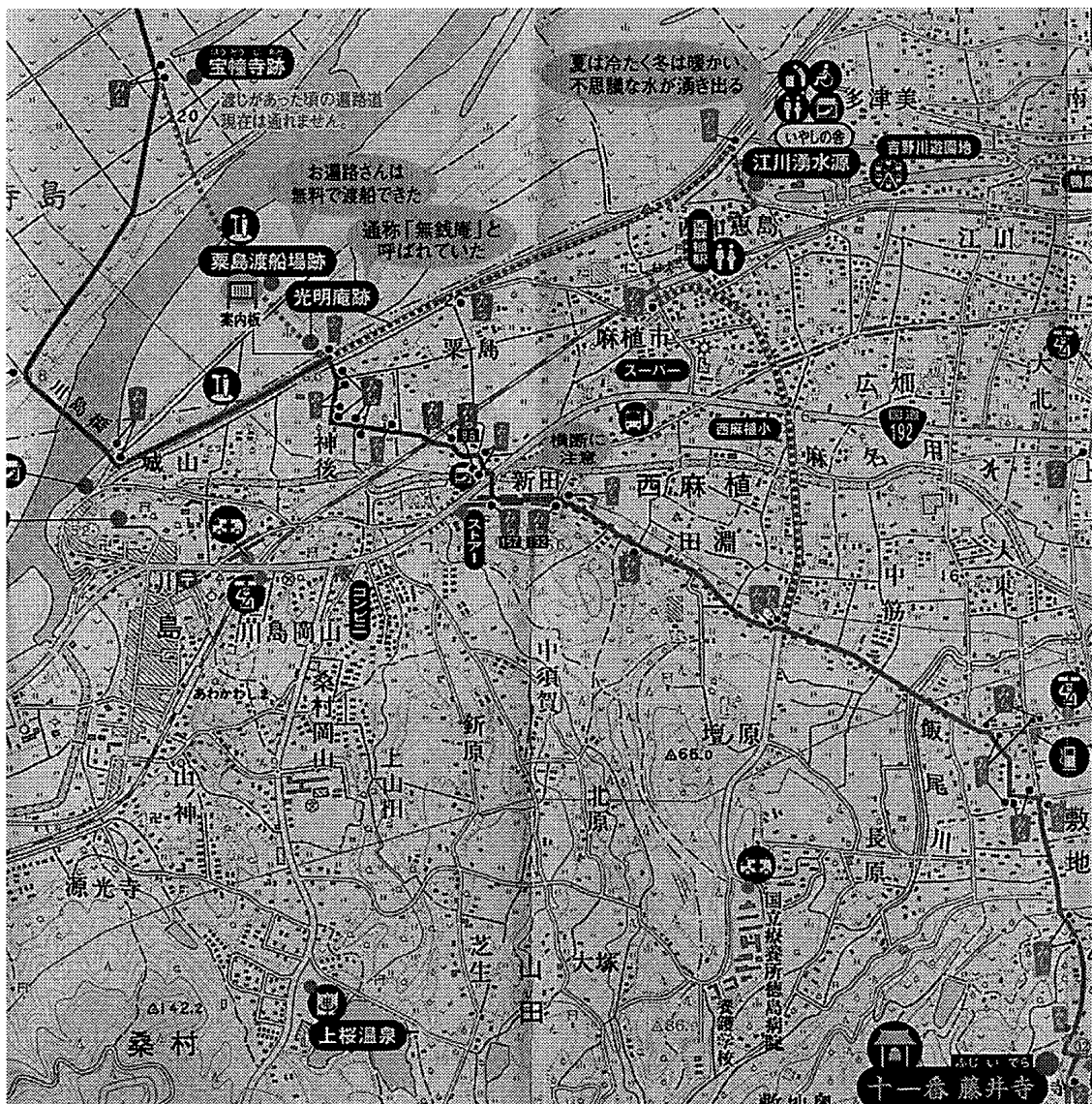


図3 鴨島のいやしのみち。左上から右下に至る実線がメインルート（遍路道）。中央部の「弓」の字型の点線が江川湧水源をめぐるサブルート。その他、トイレやビューポイント、コインランドリー、無料仮眠施設などが細かく記されている（折りたたみ式の無料配布地図「昔からの歩き遍路地図・最後まで残った空海の道」より）。

川湧水源の水温異常現象を実際に体感してほしいという意見が出されるなど、水との触れあいが鴨島ルートのテーマ設定に大きな役割を果たした。2002年度には江川湧水源に隣接してトイレ兼休憩所「いやしの舎」を設置し、周辺の歩道整備と合わせて、鴨島地区におけるサブルートが完成した。

このサブルートで注目したいのは、10番から11番札所へのルートとしては遠回りになるという意味で、歩き遍路に目的合理的な道ではないということである。むしろ、鴨島のシンボルである江川湧水源を「いやしスポット」として提示することで、遍路など外部からの来訪者に見て・知って・体験してほしいという地域住民の欲求から生まれてきたものと言えよう。つまり、「いやしのみち」事業で作られていくのは、歩くための道のみならず、当該地域が対外的に発信する価値観や意味性を付与された「表象の道」でもあるのである。

#### (4) その他のサブルート

神山町の「衛門三郎を偲ぶ、最後まで残った空海の道」では、温泉施設や道の駅をめぐるルートが、上板町の「かみいた路・道・未知 和（なごみ）ロード」では、可動堰問題で注目された吉野川第十の堰や、伝統技術の体験学習施設である「技の館」、歴史民俗資料館、国や県の天然記念物などのスポットをめぐるルートが、それぞれサブルートとして用意されている。特に上板町では、町の中央を東西に抜ける基本ルートが5.2 kmであるのに対して、南北に用意されたサブルートはそれぞれ14.4 km, 20.0 km, 合計すると基本ルートの約6倍、34.4 kmにも及ぶ。

神山町の温泉施設は町の交流の場であり、道の駅は充実した特産物の販売所を持つ。上板町の場合は、町の歴史や伝統を展示する場が盛り込まれている。いずれにおいても、「いやしのみち」は、「いやしスポット」「サブルート」という仕掛けを通じて、地域のアイデンティティを表象する空

創出される表象空間

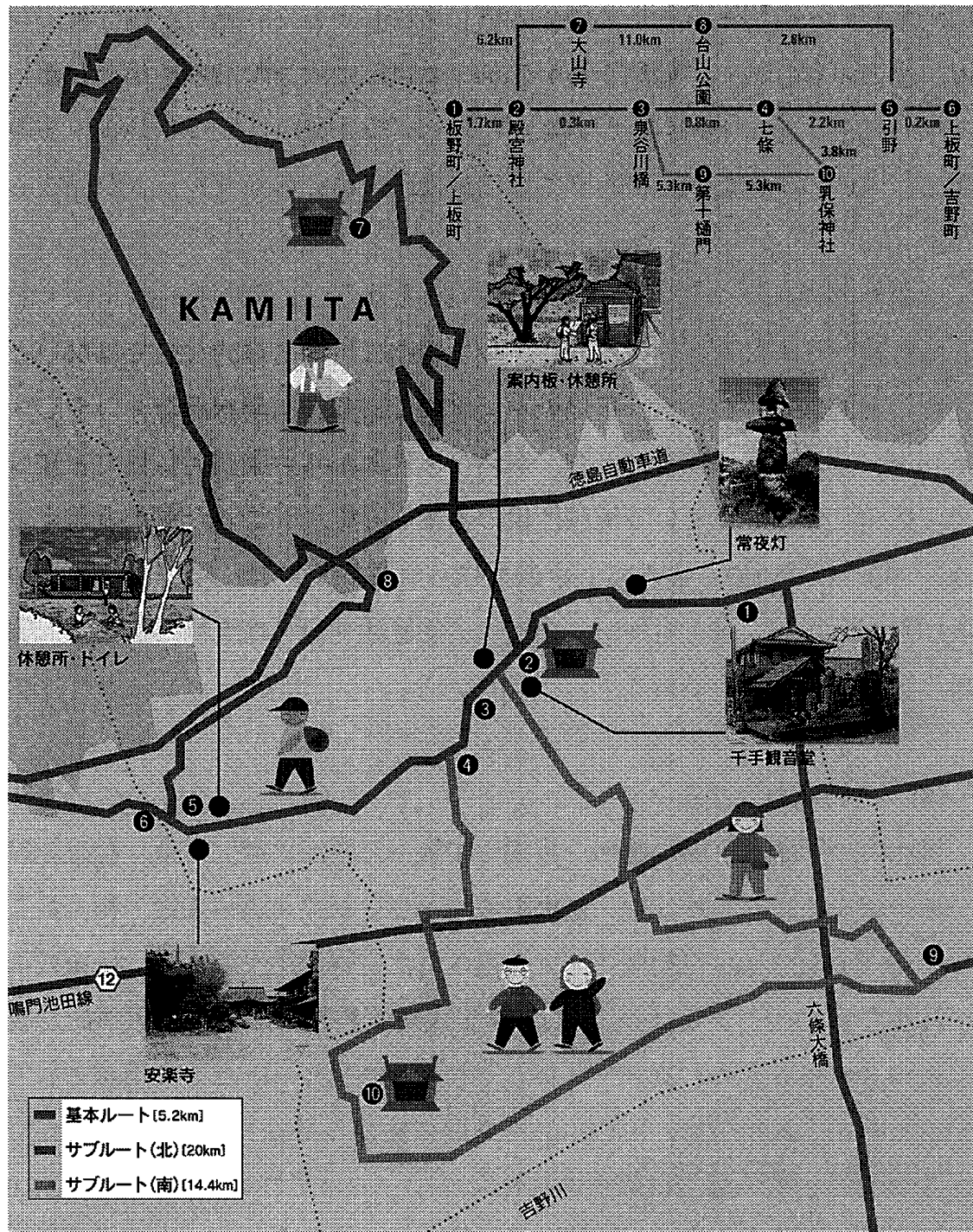


図4 上板のいやしのみち [徳島県編 2004: 5]. 中央を東西に抜ける 5.2 km の基本ルートに対して、全部で 34.4 km に及ぶ南北のサブルートを持つ。

間を創出し、これを四国遍路の巡礼空間に接続することで、外部のまなざしに、彼らの自己イメージを主体的に投げかけるという構造を持っているのである。

#### 4. 考察——宗教・ツーリズム・地域のコンテクストから

観光社会学者の遠藤英樹は、観光をめぐる3つの立場として、1. ツーリスト（観光を消費する者）、2. プロデューサー（観光を制作する者）、3. 地域住民を挙げ、3者の相互関係が社会的・文化的背景に立脚する図式を、観光社会学の領域を示す枠組みとして提示する〔須藤・遠藤 2005: 15-21〕。この枠組みでは、プロデューサーが観光を制作し、ツーリストが消費するという明快な構造化がなされている一方、地域住民は観光へのポジショニングが一定しない。観光開発やイベントの創出によって、伝統やアイデンティティの変容にさらされる客体であり、観光を、歓迎する一方で拒絶するというようなアンビバレントな想いを時に抱くものとされている。だが、すでに見たように、むしろ主体的に自らの「伝統」や「アイデンティティ」を発掘、再構成し、外部者にプレゼンテーションする積極性を持つことも忘れてはならない。

このような視点に立つとき、いやしのみちや遍路道再生運動は、少なくとも宗教、ツーリズム、地域の3つのコンテクストに引きつけて読み解くことができる。ここでは特に、①空間の再編と、②（来訪者を迎える）望ましい地域住民の姿に焦点を当てて考察したい。

##### (1) 宗教的コンテクストから

まず宗教的コンテクストからは、遍路道再生運動は四国遍路という民俗宗教の復興運動と理解できる。遍路道復興運動において重視されることの一つに、道標や石仏の調査、復興がある。これは復興すべき「本来の遍路道」を特定する基礎的作業として位置づけられ、盛んに行われている。そ

して、見出された道は、特に批判的考察を受けることなく、かつての「信仰の道」と理解されることが多い。この意味で、遍路道再生運動は、多くの「信仰者」が歩いた—ひいては空海も歩いたであろう—「本来の遍路道」を創出する作業なのである。

また、道の整備や、トイレなどの付帯施設の設置・清掃・管理、来訪者への声かけなどのソフト的な実践は、巡礼者歓待習俗である「接待」の拡張であり活性化と考えられる。

したがってこの観点からみる遍路道復興運動は、大師信仰の共有者たる地域住民が、日常の中に埋没した「聖なる空間」を掘り起こし、信仰に基づくいきいきとした交流の場として再生するものとして説明できる。

## (2) ツーリズムのコンテクストから

一方で、この試みは観光振興政策として理解することも可能である。遍路道再生運動は、四国遍路という宗教文化が遍路者という外部からのまなざしによって活気づくなかで、観光資源となりうることに地元側が気づき、その価値を改めてアピールする運動であるという理解は、ツーリズムの文脈からは決して不自然なものではない。

特に地域の景勝地や歴史文化資源をいやしスポット、サブルートとして組み込むといういやしのみちの発想は、信仰の道としての遍路道に、観光のモデルコースを接続するという形での空間の再編成といえよう。

この点について、メディアの受け止め方はより明快である。「観光客を呼び込める「散策のみち」を整備し、地域経済の活性化につなげる狙い」「四国そのものを巨大な歴史テーマパークに仕立てる遠大な構想」など、いやしのみちに関するほとんどの新聞報道では、観光面での効果への期待について言及しており、その背景には、徳島県の観光客の伸び悩みや、滞在型の観光スポットの少なさといった問題や、架橋時代における舵取りの遅れや誤りがストロー現象や通過点化を招きかねないという危機感がある

ことを指摘している<sup>9</sup>。

また、遍路道再生運動では、接待等を通して培ってきた地域住民の「もてなし」の心が強調される。鴨島町の事例でも「もてなし」の実践として、挨拶、声かけや道の清掃や草花による装飾などが提案されている。この「もてなし」は、ツーリズムの文脈ではホスト側の重要な要素になるものである。巡礼功德の分与を目的とした宗教的实践としての接待を、「もてなし」の心へと読み替えることは、よきホストを育成するという観光振興政策の一環ともなるのである。

### (3) 「地域」のコンテキストから

いやしのみちや遍路道再生運動を理解するためには、宗教とツーリズムに加えて「地域」というコンテキストが重要である。

先述したように、圓藤元知事は遍路道再生運動を行政と住民との「協働」、「調和」、「環境」等、21世紀の県政のキーワードの元に位置づけ、「徳島の21世紀への宝づくり」と表現している<sup>10</sup>。つまり、いやしのみちは地域づくり事業としての出自を持つのである。

遍路道に接続されるのは観光の定番となるような景勝地や娯楽施設のみではない。第三回鴨島塾では「自慢探し」がテーマとなり、「自分の町にはこんな良いところがある」という点を徹底的に引っ張り出す必要が示された〔徳島県教育委員会編 2002: 20〕。その結果、先に見たようにいやしのみちは、地域の歴史・伝統・個性等、さまざまな意味性をひとつにつなげ、外部からのまなざしに投げかける表象の空間ともなったのである。

またいやしのみちでは、接待とボランティアが、他者へ積極的に働きかけるものとして接合される。主体的に接待を行う姿勢が、ボランティアを実践する積極性へと巧みにスライドされ、地域づくりへの参加が促される

<sup>9</sup> 日本経済新聞 2000 年 6 月 17 日、徳島新聞 2000 年 1 月 1 日など。

<sup>10</sup> 徳島県広報誌『OUR とくしま』2000 年 1 月号。

表3 宗教、ツーリズム、地域のコンテキストから読み解く「いたしのみち」

	A) 空間の再編	B) 望ましい地域住民の姿
①宗教…民俗宗教「四国遍路」の復興運動	「本来の遍路道」(信仰の道)の特定・復興作業	「接待」を通じて巡礼者を歓待する大師信仰共有者
②ツーリズム…観光振興政策	地域の景勝地や歴史文化資源を取り込んだ「観光モデルコース」	「もてなし」の心を持つ良きホスト
③地域…21世紀に向けた地域づくり	地域の歴史・伝統・個性等を外部のまなざしに投げかける表象空間の創出	ボランティア・住民参加型の地域づくりへの主体的参加者

のである。

## 5. おわりに——遍路道再生運動と聖なる空間のゆくえ

以上、いたしのみちを事例として見たように遍路道再生運動は、宗教、ツーリズム、地域という少なくとも3つの領域に関連している。聖なる空間は、これらの領域からそれぞれに意味づけられ、活用すべき資源として掘り起こされ、再編へと方向づけられる。だが、これらは排他的な類型なのではなく、時に相互に絡み合った、聖なる空間の多義性を示すものである。

ただ、いたしのみちにおいては、宗教的コンテキストはやや特殊な位置にある。いたしのみちは県が資金を出す公的事業である。したがって、宗教的コンテキストについては遍路道の価値の源泉として敬意は払われつつも、特定の寺院・教団に偏った利益をもたらす可能性は原則として排除される。鴨島では、道標と石仏が一体化した「一丁仏」に「仏」という字が入っているという理由で、神山では番外札所・柳水庵が「宗教法人」であるという理由で、補助事業の直接的な対象になることが難しいと言及されている〔徳島県教育委員会編 2002: 24 および浅川 2003: 75〕。遍路や巡礼、利益、功德、信仰などの伝統的宗教性に関する語句に変えて、「いや



し」という中性的な言葉を前面に出すのは、なにも現代社会においてそうした宗教的言説が効力を失って久しいというだけではないのである。

だが個別の実践者においては、その根底に「信仰」や精神性を持つことが吐露されることも少なくはない。例えば、筆者がインタビューした神山町のある婦人は、自らを「ボランティア・マニア」と称する。彼女は、いやしのみち検討会議の委員を努める一方、地域ボランティアを組織し、柳水庵の清掃活動や飴湯の接待を行っている。彼女は、町の世話でヘルパーの資格を取り、独居老人への弁当宅配サービスや、町の心身障害者の支援活動を立ち上げるなど、以前から積極的なボランティア活動を行っており、現在では4つのボランティアを掛け持ちするに至っている。その原動力を彼女は「喜んでくれるのが好き」という気持ちにあると説明するのだが、「でもオダイッサンへの信仰が根底」にあり、彼女自身、車による2度の遍路経験を持つとも述べるのである<sup>11</sup>。

いやしのみちはその意義を評価されながらも、平成19年度に廃止される見通しであるという<sup>12</sup>。厳しい財政状況、他県との連携の難しさ<sup>13</sup>、そもそも徳島県内においても、新たな登録希望がない状況が影響したと考えられる。

だが、こうした状況は遍路道再生運動の頓挫を示すわけではない。すでに述べたように遍路道再生運動は多様性を持つ。いやしのみちに登録されないローカルな遍路道再生運動が、個人や地域ボランティアの手によって

<sup>11</sup> 2003年8月に実施した聞き取り調査による。

<sup>12</sup> 平成18年度の政策評価 (<http://www.pref.tokushima.jp/generaladmin.nsf/dockey/seisaku/>) による。

<sup>13</sup> 2006年に始まった「四国観光検定」の公式ガイドブックの表紙には、4県の県境が入った四国を抱え、鉛筆を持ったお遍路さんのイラストが掲載されている。四国遍路は四県をまとめ上げる唯一のシンボルとして活用されている反面、阿波踊り、高知城、道後温泉、さぬきうどんという各県独自の観光資源をイメージさせる写真が掲載され、口絵でも、橋、自然、巡礼、歴史、祭り、食、特産品、温泉などの各テーマにおいて各県の独自性が強く主張される構成になっている。



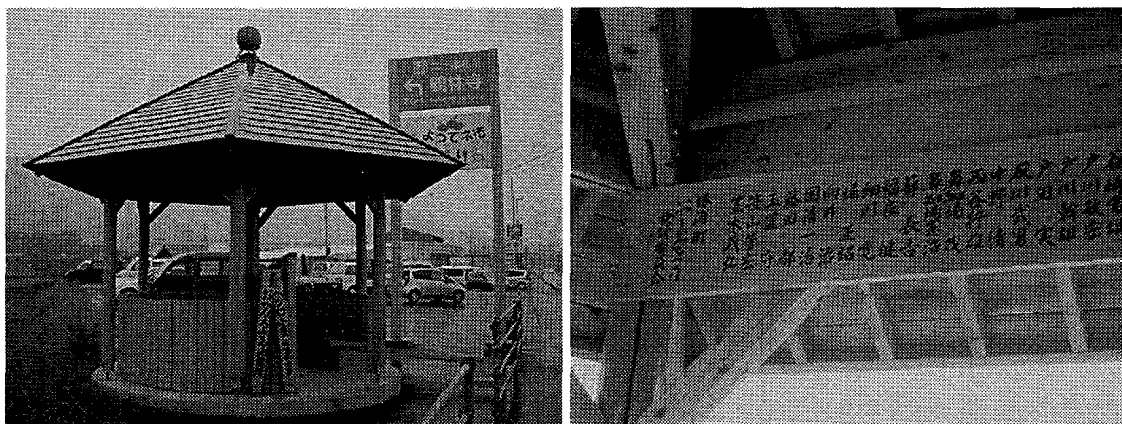


図5 いやしのみちとヘンロ小屋プロジェクトのコラボレーションによる勝浦町のヘンロ小屋。JAの産直販売所「よってネ市」に隣接して設置された。(2006年10月筆者撮影)。

いくつかの地域で実践されており、筆者も現在調査中である。

同時に、これらの遍路道再生運動に関連する人物やグループの相互交流やネットワーク化も急速に進んでいる。建築家の歌一洋氏らによる「ヘンロ小屋プロジェクト」は、2001年から始まった巡礼者向けの休憩所を設置する民間のボランティア運動である。いやしのみちのパンフレットである『いやし通信』には、歌氏や第一号ヘンロ小屋への土地提供者らのインタビュー記事が掲載されている。そして同プロジェクトで11号目となるヘンロ小屋はいやしのみち4番目の登録地区である徳島県勝浦町に設置された。その内部には協力者を記した木板が掲げられており、そこには「勝浦町いやしのみちづくり検討委員会」の銘が記されている。

筆者がこのような遍路道再生運動のネットワーク化を強く印象づけられたのは、2005年7月に56番札所仙遊寺で開かれた世界遺産登録運動の総会フォーラムであった。この会議には、世界遺産登録運動の中心的人物である仙遊寺住職の小山田憲正氏その他、歌一洋氏、そして遍路道に不法投棄されたゴミに失望したという巡礼者からの新聞の投書をきっかけに、2004年より独自の遍路道清掃運動を展開している新開善二氏らが参加していた。研修会議では、自らのボランティア活動の報告を行った新開氏

が、もし同様の運動を行うのであれば必要なノウハウを提供すると語り、またその後の座談会では、人材の交流、情報・ノウハウの交換が活発に行われていた。

そもそもこれらの遍路道再生運動には、「いやし」や「接待」などがキーワードにおかれ、実際に身体を動かして「実践」することの意義が強調され、ボランティア組織を活用して展開していくなど、いくつかの親和性や共通点が認められる。

つまり、遍路道再生運動は、それぞれ独立してあるというよりも、巡礼空間に重層的に折り重なる形で展開しているのである。そして、それぞれの遍路道再生運動に関わっているさまざまなエージェントは、ひとつひとつの小さな共通点を結び目としながら、相互に交流する緩やかなネットワークを形成し、全体として、重層的で有機的な運動体へと変貌を遂げようとしているように思われる。

政教分離の原則によって、宗教的言説が押さえ込まれる「行政」という束縛から解放された個人的・地域的实践やそれらのコラボレーション、そして多様なエージェントが有機的にネットワーク化されるなかで起こるであろう解釈のすり合わせ作業の中から、どのような聖なる空間と宗教的次元が表出されるのか、今後も注目される。

## [付 記]

本稿は平成18年度・19年度科研費基盤研究(C)の交付を受けた共同研究「空間の表象に関する宗教民俗学的研究」(研究代表者:鈴木正崇・慶應義塾大学教授)の成果報告の一部である。同研究課題に筆者は研究協力者として参加した。

また本稿は、平成19年度「宗教と社会」学会第15回学術大会(於・駒澤大学)でのパネル発表「ツーリズム・聖地・巡礼」における筆者の口頭発表「創出される表象空間—遍路道再生運動の事例から」に加筆・修正

を加えたものである。パネル代表者の山中弘先生、コメンテーターの橋本和也先生をはじめ、パネリストの今井信治、寺戸淳子、真鍋祐子の各先生方ならびにフロアからの質問者の皆様の的確かつ有益なご指摘に、心より感謝申し上げます。

### 参 照 文 献

- 浅川泰宏 2003「柳水庵」『道の空間構成における水の文化の重層性に関する研究』（平成13年度～平成14年度科研費基盤研究C2研究成果報告書，研究代表者：長田攻一），早稲田大学道空間研究所（編），pp. 69-76, 早稲田大学道空間研究所。
- 浅川泰宏 2006「「いやしのみち」事業からみる遍路道再生運動—徳島県の例を中心に」『道の多元的空間構成に関する研究—陸・海・空を切り口として』（平成15年度～平成16年度科研費基盤研究C2研究成果報告書，研究代表者：長田攻一），早稲田大学道空間研究所（編），pp. 124-131, 早稲田大学道空間研究所。
- 浅川泰宏 2008 予定「四国遍路のツーリズム化と観光概念のポジション—『観光』が逆照射する『信仰』『文化』26号，駒澤大学。
- 岩本通弥（編）2007『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館。
- 太田好信 1998『トランスポジションの思想』世界思想社。
- 小田匡保 2002「戦後日本の宗教地理学—宗教地理学文献目録の分析を通じて—」『駒澤地理』38号：21-51。
- 小田匡保 2005「『宗教文化の歴史地理学』特集号にあたって」『歴史地理学』47号1巻：1-3。
- 木村勝彦 2006「長崎のカトリック教会群と「観光のまなざし」—外海を事例として」『「場所の聖性」の変容・再構築とツーリズムに関する総合的研究』（平成15年度～平成17年度科研費基盤研究C研究成果報告書，研究代表者：山中弘），pp. 36-44。
- 坂田正顕 2003「道の社会学と遍路道」長田攻一，坂田正顕，関 三雄（編）『現代の四国遍路—道の社会学の視点から—』学文社 58-104。
- 須藤 廣・遠藤英樹 2005『観光社会学—ツーリズム研究の冒険的試み—』明石書店。
- 鈴木正崇 2004『祭祀と空間のコスモロジー—対馬と沖縄—』春秋社。
- 関 一敏 1993『聖母の出現—近代フォークカトリシズム考—』日本エディタース

クール出版部.

田中智彦 2004『聖地を巡る人と道』岩田書院.

寺戸淳子 2006『ルルド傷病者巡礼の世界』知泉書院.

徳島県（編）2001『四国いやしのみちづくり 指針・提言集』徳島県.

徳島県（編）2002『いやし通信』vol. 1 徳島県商工労働部交流推進局交流企画課.

徳島県（編）2003『いやし通信』vol. 2 徳島県商工労働部交流推進局交流企画課.

徳島県（編）2004『いやし通信』vol. 3 徳島県商工労働部交流推進局交流企画課.

徳島県教育委員会編 1999『徳島県歴史の道調査報告書』（第1集 讃岐街道 淡路街道）徳島県教育委員会.

徳島県教育委員会編 2002『平成13年度 徳島県歴史の道 整備活用総合計画事例報告書』（鴨島町編）徳島県教育委員会.

徳島県教育委員会編 2003『平成14年度 徳島県歴史の道 整備活用総合計画事例報告書』（神山町編）徳島県教育委員会.

徳島県教育委員会編 2004『平成15年度 徳島県歴史の道 整備活用総合計画事例報告書』（勝浦町編）徳島県教育委員会.

橋本和也 2006『「(人と人を結ぶ) 地域まるごとミュージアム」構築のための研究』（平成15年度～平成18年度科研費基盤研究B2研究成果報告書, 研究代表者: 橋本和也).

藤原久仁子 2004『「聖女」信仰の成立と「語り」に関する人類学的研究』すずさわ書店.

松井圭介 2003『日本の宗教空間』古今書院.

松井圭介 2006「観光戦略としてのキリシタン—宗教とツーリズムの相克」『人文地理学研究』30号: 147-179.

松井圭介 2007「世界遺産運動にみる宗教的地域文化へのまなざし—長崎の教会群をめぐって」『人文地理学研究』31号: 133-158.

森 悟朗 2007「戦後の神奈川県江の島における観光地化と神社・住民—住民のまちづくり活動を中心に—」『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』1号: 279-330.

山中 弘 2006「『場所の聖性』の変容をめぐる葛藤—五島列島の「教会めぐり」」『『場所の聖性』の変容・再構築とツーリズムに関する総合的研究』（平成15年度～平成17年度科研費基盤研究C研究成果報告書, 研究代表者: 山中弘), pp. 45-50.

山中 弘 2007「パネルの主旨とまとめ」『宗教研究』80巻4号: 151-152.

COLEMAN, Simon and ELSNER, John 1995 *Pilgrimage: Past and Present in the world Religions*. Harvard University Press.

- FREY, Nancy 1998 *Pilgrim Stories: On and Off the Road to Santiago*. University of California Press.
- GRABURN, Nelson H. H. 1989 (1991) *Tourism: The Sacred Journey*. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism 2nd edition*. Valene L. SMITH (ed), pp. 21-36. University of Pennsylvania Press. (『観光・リゾート開発の人類学—ホスト & ゲスト論でみる地域文化の対応—』三村浩史監訳：勁草書房).
- HARVEY, David 1989 (2005) *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*. Basil Blackwell. (『ポストモダン性の条件』吉原直樹監訳：青木書店).
- LEFEBVRE, Henri 1974 (2000) *La Production de l'Espace*. Editions Anthropos. (『空間の生産』斎藤日出治訳：青木書店).
- READER, Ian 2005 *Making Pilgrimage: Meaning and Practice in Shikoku*. University of Hawaii Press.
- SOJA, Edward W. 1989 (2003) *Postmodern Geographies: The Reassertion of Space in Critical Social Theory*. Verso. (『ポストモダン地理学—批判的社会理論における空間の位相』加藤政洋，西部均，水内俊雄，長尾謙吉，大城直樹訳：青土社).

(インターネット資料)

国土交通省四国地方整備局「新四国のみち」<http://www.skr.mlit.go.jp/road/sinsikok/>

四国観光立県推進協議会「いやしのみち」<http://www.shikoku.gr.jp/iyashi/>

仙遊寺「世界遺産運動」<http://www1.e-machisite.net/senyuji/isan/isan.html>

徳島県 <http://www.pref.tokushima.jp/>

徳島県政策評価システム <http://www.pref.tokushima.jp/generaladmin.nsf/dockey/seisaku/>

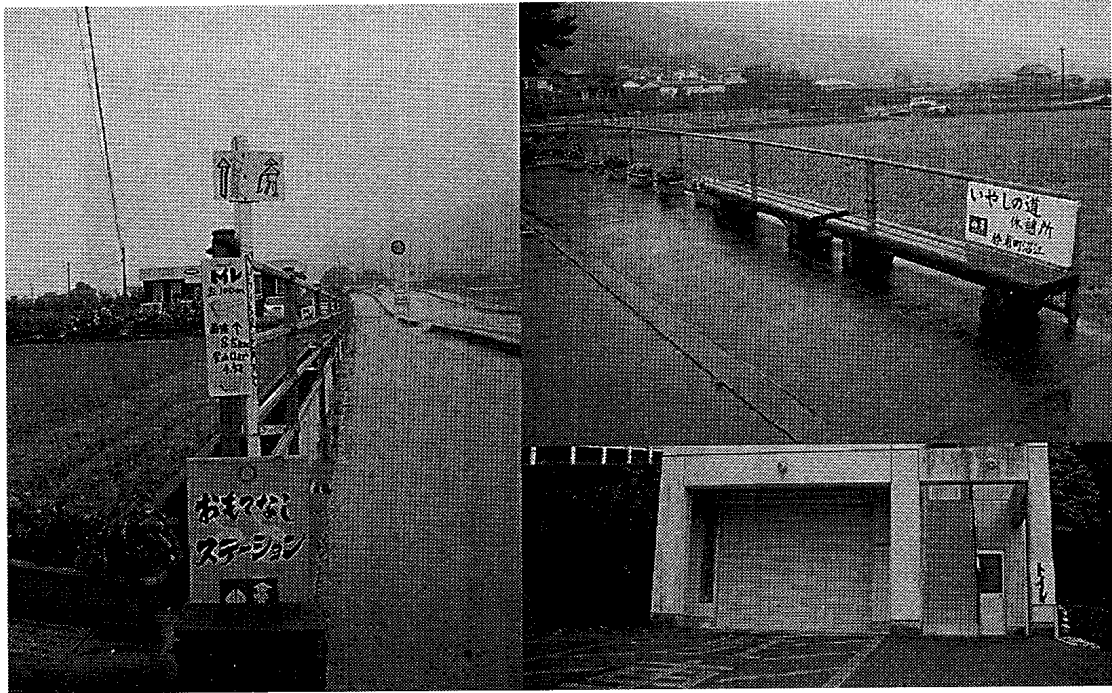
※すべてのサイトは2007年5月に閲覧または確認した。

【参考資料】

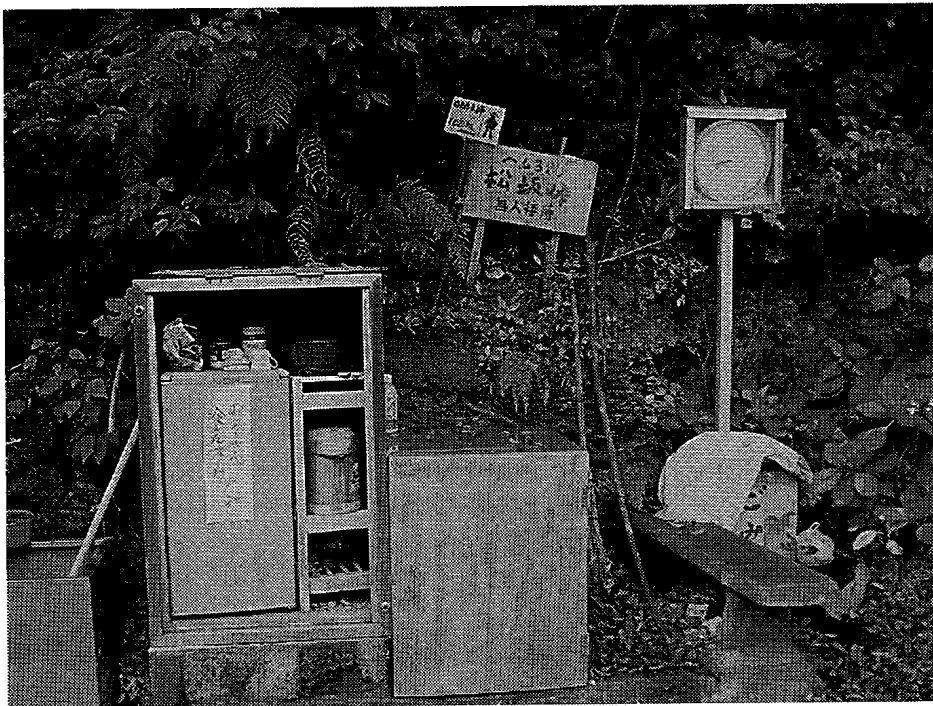


- (1) 上板町のいやしのみち (2005 年 2 月筆者撮影)  
上…地域の生活道でもある遍路道。草花を植えたプランターが設置されている。  
下…伝統技術の体験学習施設「技の館」の案内板に並置されたいやしのみちのベンチと地図。

創出される表象空間



(2) 勝浦町沼江地区のいやしのみち (2006 年 10 月筆者撮影)  
左…ロータリークラブの「おもてなしステーション」、右上…「いやしのみち休憩所」として設置された木製のベンチ、右下…トイレは消防署の1階のものを流用



(3) 個人によって行われている遍路道再生運動の例。トンネルの入口から反対側への山越えの道を「再生」し、登り口に休憩所を設けて接待を行っている (2007 年 8 月筆者撮影)